# 松山学院 ジュニア新

北海道インハイ 2023

北海道が主会場の全国高校総体（インターハイ）第17日は７日、函館競輪場で自転車トラック競技を行い、男子チームスプリント予選で松山学院が１分15秒568のジュニア日本新記録で決勝進出。女子500㍍タイムトライアルで玉井葵妃（松山学院）が６位入賞した。

### 自転車

◇…愛媛勢の成績…◇

（函館競輪場）

▽男子スプリント予選　①松岡勇斗（松山学院）10秒855＝1回戦進出⑳石崎俊旺（松山聖陵）11秒650＝落選

▽同1回戦

「3組」①松岡勇斗（松山学院）11秒185＝準々決勝進出

▽同4000㍍速度競走予選

「1組」①金井樹翔（松山学院）4分43秒014＝準決勝進出

「5組」⑧河本颯史朗（松山工）＝落選

▽同ケイリン予選

「1組」②和気丈一朗（松山工）＝準々決勝進出

「4組」③菊池遥煌（松山聖陵）＝予選敗者復活戦へ

「5組」①河上駿大（松山学院）11秒584＝準々決勝進出

▽同予選敗者復活戦

「4組」②菊池遥煌（松山聖陵）＝準々決勝進出

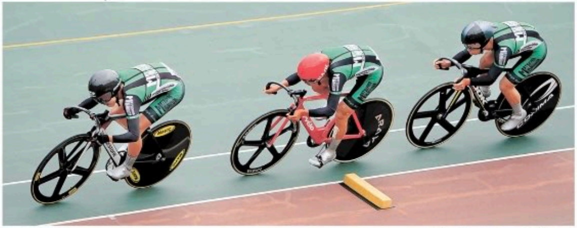
▽同チームスプリント予選（5位以下は順位確定）①松山学院（松岡、河上、中村）1分15秒568＝ジュニア日本新、高校新、決勝進出⑳松山聖陵（菊池、篠村、石崎）1分23秒906

▽女子500㍍タイムトライアル⑥玉井葵妃（松山学院）39秒343

▽同ケイリン予選

「2組」④松崎光優（松山学院）＝予選敗者復活戦へ

## 男子チームスプリント 決勝進出



【男子チームスプリント予選】㊤ジュニア日本新記録1分15秒568を出した松山学院の（左から）河上、中村、松岡㊦ジュニア日本新記録を表示する時計盤の前で喜ぶ松山学院の河上（左上）、中村（左下）、松岡＝いずれも函館競輪場

## 疾走の３人 日本一へ精根尽くまで

連なる弾丸のように３台の自転車が函館の風を切り裂いた。男子チームスプリント（４００㍍×３）予選で松山学院が１分15秒５６８のジュニア日本新記録を樹立。最終走者の松岡勇斗は悠々と手を掲げ、拍手が包むバンクを回った。

チームスプリントは３人でスタートし、４００㍍のバンクを１周するごとに１人が離脱していく。３人の脚力に加え、ライン取りや隊列の組み方など細部への気配りが成否を分ける種目だ。

松山学院の３人はスタート直後からスムーズに固まりを形成。「後ろが離れないよう前半は少しスローに入る作戦だった」と先頭の河上駿大。２走の中村和樹も「（河上に）しっかり付くことを一番意識した」と追走し、最終走者の３年生松岡にバトンをつないだ。

最後の４００㍍を松岡は「苦しかった」と振り返る。「目の前のことを全力でやった」と体力を絞り尽くし、フィニッシュラインを駆け抜けた。

３人が口をそろえたことが二つある。一つはゴール直後に精根尽き、新記録を伝えるアナウンスをはっきり聞き取れなかったこと。ガッツポーズを見せた松岡も「本当は何が起こったか分かっていなかった」と、注いだ力の大きさを語った。

もう一つは、あくまで照準は8日の１、２位決定戦に定めていること。松岡は「今日記録が出たのはたまたま。日本一のタイトルを取りたい。また気を引き締める」と会場を後にした。

（柳生秀人）

## 女子500タイムトライアル

この日唯一決勝が行われた女子５００㍍タイムトライアルで玉井葵妃（松山学院）が６位

【女子５００㍍タイムトライアル】39秒３４３で6位に入った松山学院・玉井＝函館競輪場

## １年玉井６位 進学機に競技転向

に入った。高校から自転車を始めたという１年生ながら、いきなり入賞を果たし「自信になった」と笑顔を見せた。

玉井はスポーツクライミングなどに取り組んでいたが、運動能力のテストで自転車への適性を見いだされ、高校進学を機に転向した。

「初めて見た時は圧倒された」というほど強度の高い練習に食らいつき、実力を伸ばしている。

決勝では力強くバンクを疾走し、39秒３４３の好タイムをマーク。「自己ベストを出せて良かったが、全国には強い選手がたくさんいると分かった。いつかメダルを取る」と高校で最初に遂げる目標を定めた。

（柳生秀人）